

教育委員会会議の概要（7月第1回臨時会）

◆ 日 時 平成26年7月15日（火曜日）午後3時00分

◆ 場 所 本庁舎 第二委員会室

◆ 出席委員 委員長 永広 昌之
委員長職務代理者 油井 由美子
委員 草刈 美香子
委員 今野 克二
委員（教育長） 上田 昌孝

◆ 会議の概要

1 開 会 午後3時00分

2 会議録署名委員の指名

3 協議事項

（1）平成27年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択について

委員長

それでは、協議事項「平成27年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択について」ということで、まず、協議のスケジュールについて、教育指導課長より説明をお願いします。

教育指導課長

平成27年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書については、7月8日に「平成26年度仙台市立義務教育諸学校教科用図書選定協議会」から、教育委員会に対して答申が行われました。この答申を踏まえながら、本日より3日間にわたり協議をお願いしたい。

おおまかなスケジュールについては、協議事項1の資料「平成27年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択について」の1ページをご覧ください。

本日は小学校用教科書の、国語、書写、社会、地図、算数の協議、7月22日は小学校用教科書の理科、生活、音楽、図工、家庭、保健と特別支援教育関係の協議、7月30日は継続協議があった場合の教科書について協議した後、小学校、特別支援教育の順で採択をお願いしたいと考えている。

なお、仙台市立中学校用教科書については、5月の定例教育委員会ですすでにご説明しているとおり、本年度と同じ教科書を使用することになっている。

委員長

委員の皆様、よろしいか。

各委員

異議なし。

委員長

それでは、配付資料について、教育指導課長より説明をお願いします。

教育指導課長

協議事項1の3ページの資料1は、宮城県教育委員会から示された「平成27年度使用教科用図書（小学校）採択基準」である。これは県内各採択地区において、適切な採択を確保するための基準として、宮城県教育委員会が作成したものである。4ページの資料2は、同じく宮城県教育委員会から示された「学校教育法附則第9条の規定による教科用図書（一般図書）の採択基準」である。

同じ資料の5ページの資料3は、5月の定例教育委員会で議決された「平成27年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択方針」である。6ページの資料4はこれまでに「仙台市で採択された発行者一覧」である。

続いて、別紙資料1は、平成26年度仙台市立義務教育諸学校教科用図書選定協議会からの答申である。別紙資料2は、平成27年度使用の仙台市立小学校教科書の選定に関する資料「調査研究委員会」の報告書である。調査研究委員会は、教科書の採択に関し、必要な資料を作成するために、校長及び教頭で構成されたものであり、専門委員からの報告書をもとに総合的に調査研究を行った。別紙資料3は、調査研究委員会に置かれている専門委員がとりまとめた「専門委員報告書」である。専門委員会は、調査研究委員会の下部機関として設置し、小学校の教諭で構成されている。この報告書は、報告書1と報告書2があり、報告書1は、宮城県の採択基準に照らし、すべての発行者について記入したものである。報告書2は、指導要録の観点や仙台市の採択方針の9つの観点に則り、特徴的な面について記入したものである。別紙資料4は、「平成27年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の選定に関する調査研究委員会報告書（特別支援学校及び特別支援学級）」である。別紙資料5は、「平成27年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の選定に関する調査研究委員会専門委員報告書（特別支援学校及び特別支援学級）」であり、別紙資料6は、平成26年度仙台市立義務教育諸学校教科用図書選定協議会の議事録である。別紙資料7は、宮城県教育委員会から示された平成27年度使用教科書（小学校）選定資料であり、先ほどご説明した協議事項1の3ページの資料1の宮城県教育委員会の採択基準の4つの観点について、教科毎に全発行者の特徴をまとめたものである。別紙資料8は、「宮城県教育委員会平成27年度使用教科書（小学校）選定資料社会科（別冊）」である。これは、平成25年度の宮城県議会において請願書が出され、県教育長が作成を指示したものであり、各発行者の特徴を一層明確にするため、記載内容、記載分量を比較できるように作成されたものである。別紙資料9は、文部科学省が平成26年4月に作成した「小学校教科書目録（平成27年度使用）」、別紙資料10-1から別紙資料10-11は、各教科の「平成27年度使用小学校教科書編集趣意書」である。

配付資料については、以上であるが、このほか、供覧用の参考資料として、2つの資料があり、1つ目の資料は「平成26年度教科書展示会の市民アンケート」である。これは6月に、仙台市内の3つの教科書センター及び5つの市立図書館で実施した教科書展示会において、実施内容についてのアンケート結果である。2つ目の資料は、「平成27年度使用教科用図書の採択に関する資料（学校からの希望表）」であり、仙台市立小学校の教員が、教科書展示会において調査研究したことを、学校ごとにまとめたものである。この2つの閲覧資料は、委員長の机上に用意しているので、協議の際に、ご覧いただきたい。

委員長

ただいま、配付資料についてご説明いただいたが、配付資料あるいはこれに関わる選定協議会の審議等についてご質問等はないか。

委員

5月の定例教育委員会で資料として、文部科学省からの「平成27年度使用教科書について」という通知があり、その中の「教科書採択の改善について」に教科書が障害その他の特性の有無に関わらず児童生徒にとって読みやすいものになっているか、とユニバーサルデザインに配慮するよう求められているが、この点についてどのような調査研究が行われたのか。

教育指導課長

文部科学省においてもユニバーサルデザインに配慮した教科書の作成を推奨している。仙台市においても色の見分けが困難な児童もいるため、どの児童にとっても学習上支障を来さないような配慮が重要であると認識している。そこで、ユニバーサルデザインに配慮しているか、教科書編集趣意書及び見本本を確認した。

その結果、1者のみ教科書編集趣意書及び見本本にユニバーサルデザインについての記載がなかったため、見本本を検品したところ、ユニバーサルデザインに配慮されていた。

したがって、全ての教科書についてどの児童にとっても学習上支障のないような工夫がされてい

ると考えている。

委員長

ユニバーサルデザインの件は全ての教科に関わる案件だが、全ての教科書会社について特に問題ないと理解してよいか。

また、概要で構わないが、選定協議会ではどういう審議の進め方をし、教科書をどのように閲覧し、チェックしたのか。

教育指導課長

ユニバーサルデザインについては、全ての教科書が特に問題ないと考えている。

選定協議会については3回開催した。第1回選定協議会では委員を委嘱し、スケジュール等について説明した。その後、教科書の閲覧を1時間程度行った。第2回、第3回選定協議会においては、先ほど申し上げた専門委員会から提出されて報告書をもとに、委員の皆様は教科書を閲覧していただきながら、さまざまなご意見をいただき、その結果を別紙資料6として平成26年度仙台市立義務教育諸学校教科用図書選定協議会の議事録としてまとめたものである。

委員長

協議に入る前に、これからの進め方についてお諮りしたい。

まず、先ほど説明があったとおり、採択に係る議決は7月30日に開催予定の定例教育委員会でを行う。本日は、小学校用教科書についての協議を行う時間とし、順次進めてまいりたい。教科書については、各委員の元に事務局から届けていただき、本日までの間、相当の時間を費やして、実際に教科書を手に取りご覧いただいている。そこで、この場での閲覧は必要最小限にとどめ、協議に十分な時間をとるようにしたいと考えている。

ところで、本日使用する資料だが、別紙資料1から別紙資料8については、公正・公平な協議という観点から、採択終了まで非公開としている。そこで、傍聴者の皆様には資料を配付しないこととしている。採択後には当該資料も市政情報センターにおいて閲覧できるようにするので、ご了承願いたい。なお、別紙資料9及び別紙資料10については、文部科学省のホームページで公開されている。

次に、教科ごとの協議の進め方についてだが、まず、事務局の方から簡単に学習指導要領における教科の目標や別紙資料1の選定協議会の答申についてご説明いただいた後、実際に教科書を手に取りながら協議を行うことにしたいと考えている。

協議については、選定協議会から推薦された発行者を中心にしながらも、すべての発行者を対象として行いたい。

そして、7月30日の定例教育委員会で確認のうえ、採択に係る議決を行いたい。

そうしたことから、協議の適正さ、公正さを確保する観点から、本日と7月22日の協議においては、委員の皆様のご発言において、具体的な発行者名については、お手元の対応表にしたがい、発行者名ではなく、A者・B者と呼ぶようにしたい。なお、A、Bは、発行者の頭文字ではない。

以上の進め方について、ご異議ないか。

各委員

異議なし。

委員長

それでは、3日間、このような進め方で審議を行う。

【国語】

委員長

それでは、協議を始める。まず、最初に、国語について協議を行う。学習指導要領における目標や選定協議会の答申等について、ご説明をお願いしたい。

指導主事

小学校「国語」について、説明する。

小学校「国語」では、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」ことを目標としている。選定協議会においてとりまとめた小学校「国語」の全発行者の特徴

は、別紙資料1の選定協議会の答申「別紙1」の1ページにお示ししている。

選定協議会の答申にある推薦を受けた発行者は、別紙資料1の答申「別紙2」の1ページにある、A者とE者である。選定の主な理由について、A者は「単元のねらいとつけたい力に結びつく言語活動が明確に示され、基礎的・基本的な内容の定着が図られるよう工夫されている」ということである。次に、E者は「言葉の力を付けるための学習プロセスが明確に示され、児童が学びをふり返りながら主体的に学習に取り組もうとする態度の育成が可能である」ということである。

委員長

ただいまの推薦の理由の中で、例えば単元のねらい等、つけたい力に結びつく言語活動が明確に示されているとか、あるいは言葉の力を付けるための学習プロセスが明確に示されているということであるが、具体的にどのようなことか、どのようなことを指しているのか、簡単にご説明いただきたい。

指導主事

A者の単元のねらいとつけたい力に結びつく言語活動が明確に示されているということについては、てびきの中につけたい力が明確に示され、それに合わせてどのような言語活動を行えばつけたい力がつくのかということ、その学習内容が明確に示されており、それに沿って学習を進めることができるように教科書の中に記載されている。

E者については、別紙資料1の1ページに記載しているが、見開き2段組で構成されている手引きというところに学習の流れが一覧できるように示されている。それをもとにつけたい力に結びつく学習プロセスに沿って言語活動が組まれており、それに沿って学習を進めることで力が付いていく記載になっている。

委員

別紙資料6の第2回選定協議会の議事録4ページ、5ページを見ると、国語については、A者、B者、C者、E者についての意見はあるが、D者については何も意見はなかったか。

指導主事

選定協議会では、D者についての意見は特になかった。

委員長

他にご質問等がなければ、具体的な議論に入りたい。

最初に今日欠席の委員から書面で各教科について意見をいただいているので、委員の意見を紹介した上で、皆様からの意見を合わせて議論したいと思う。

国語についての委員の意見は、A者、E者、C者についてある程度評価するという意見である。

A者を評価する点としては、年間の学習計画、めあてがきちんと示されている。読む、書く、話す、聞くという4領域の配列も工夫されていて適切である。各単元で取り上げている題材も適切で、小学校の教育目標の趣旨、これは生涯にわたり学習する基盤が培われるよう基礎的な知識及び技能を習得させるという趣旨だが、これを実現させるのにふさわしい。例えば6年生の「イースター島にはなぜ森林がないのか」あるいは「ヒロシマの歌」、「プロフェッショナルたち」は感動を与え、考えさせる教材である。また、付録の「言葉の世界」は、言葉の力を認識し、読み書きなど学んだことを児童各自の学びに応じて整理する上で役立つという、いくつかの評価点を挙げて高く評価している。

E者については、各単元で取り上げている題材が、例えば時間、心、未来、自然、生命などを考え、あるいはクラスで討論する上でふさわしいものである。幅広いテーマが満遍なく取り上げられているという点を評価している。ただ、満遍なく取り上げているという一方で、深まりがやや弱いというところがあるという意見である。

C者については、幅広い分野を取り上げているが、その一方で、組織や配列にやや散漫な印象を与えるという評価である。

残りの2者については、特に意見はなかった。

以上が委員の意見だが、委員の皆様からそれぞれ各教科書について意見をいただきたい。

委員

A者については、1年生の上巻でこれから国語の学習にスムーズに入っていけるような導き方をしているし、リズム感のある言葉が並べられているという印象である。言葉の世界ではその年齢にふさわしい読み物、昔話、古典が取り上げられており、読書に導くための本の紹介が数多く掲載されていると感じた。それから、ノートの書き方、原稿用紙の使い方など基礎的なことをきちんと伝えている。

B者については、「保護者の方へ」ということで目指していることを伝え、家庭での学習の支援に役立つと思うが、1年生の教科書にしては分量が多く、字が小さめだという印象を受ける。それから、図書室、図書館という言葉が気になったが、学校の図書室と社会教育施設としての図

書館を使い分けているのはB者のみである。他の出版社の教科書は、学校の図書室も全て図書館という記載をしていて、おそらく子どもたちは学校で図書室という言い方をしていると思うので、この点は子どもたちにとってどうなのかと疑問がある。

C者については、新しい漢字を学ぼうということで、ドリルのように教科書に書き込めるところが利点だと思う。2年生からの「学びを広げる」というのは、自宅学習や実生活に役立つような学習の仕方ができるようになっている。ただ、絵と文字が重なっているところがあって、少し見にくい印象を受けた。

D者については、言葉を広げていく、自分の思いを伝える言葉が豊かになるような取り上げ方をしていると思った。6年生の教科書には、司馬遼太郎氏や日野原重明氏の文が載せられており、中学生になる子どもたちへエールを送っているというように感じる。

E者については、1年生の国語の学習への導きがスムーズであり、内容もリズム感のある言葉や物語を掲載していて、楽しみながら言葉を習得できるという印象を受けた。1年生から6年生の付録の「『たいせつ』のまとめ」は、子どもが学習したことを確認しやすく、基本的な力を付けやすいと思う。季節の言葉に関して、4年生では百人一首を全て載せており、5年生の古典でも取り扱っていて、日本人の季節の移ろいを敏感に感じ取って感性豊かに表現することを、身に付けられると思う。また、5年生で「想像力のスイッチを入れよう」というものがあるが、これから情報社会を生きていく子どもたちに必要なメディアリテラシーの力を身につける必要性を伝えていると感じられ、6年生で行うドナルド・キーン氏の「かなえられた願い」は日本の良さを子どもたちに知ってもらうには、いい題材だと思う。

全体的に見て、4年生で「1つの花」を取り上げている教科書が多かったが、少し気になる部分がある。コスモスの花が一輪だけあるのだが、私の中では、出征する父親が子どもにあげた一輪のコスモスは、たくさんあるコスモスの中から選んだ一輪であって、それが後半の家の中に咲き乱れているコスモスにつながっていくと思って読んでいたが、子どもたちは、目から見た印象で、そこに一輪だけの花しかない、父親はその一輪のコスモスを子どもに渡したという印象を受け、読み取りに対してバイアスがかかってしまうのではないかという疑問を感じた。

委員長

A者については、選定協議会の推薦理由にあるように、比較的、単元のねらい、最初の目的がきちんと示されている。最初に学習のロードマップを示して、子どもたちはどういうことをここで身につけるのか、ということが比較的分かりやすく示されている。巻末には「既習特記事項のまとめ」というものもあり、きちんとしている。また、別紙資料6の第2回選定協議会の議事録の4ページに、ノートのとりがきちんと示されていて工夫があるという意見があるが、確かにA者はその点はきちんと示されている。ただし、ノートのとりの方法は全ての教科書で何らかの形で取り上げられている。比較すると、A者のものが分かりやすいが、A者だけではなく、E者も比較的分かりやすい。それぞれ少しずつ違う示し方をしている、子どもたちに分かりやすいのは、その2者だと思う。

B者は、「保護者の方へ」というものがあるが、家庭学習にとってもやりやすいところはあるが、よく読んでみると、ほとんどの教科書で何らかの形で取り上げているので、特にB者だけの特徴ではない。

C者は、特に読書活動を推薦するという中でいろいろな工夫がある。読書活動というのは、子どもたちの言語力を強めるためには非常に重要なことであり、これについても全ての教科書で取り上げているが、読書活動に関しては、C者とA者、D者が詳しく多くの推薦図書を挙げている。また、図書館の使い方、図書室の使い方等についても丁寧な説明がある。中でも、C者は図書の推薦のところで「あまんさんの部屋」というコラム欄を設けて、作家の目で見つめた推薦図書として具体的なものを挙げているところが、特に目を引いた。

同じようなものは、A者にもあり、A者の場合には著名人がある本をお薦めする「本は友達」というコーナーを設けて、同じように具体例を挙げて、どういうところに感動したのかということを含めて紹介しているという点が、子どもたちが読書をはじめていく上で、3者、特にA者とC者は優れていると思う。

D者もたくさん本を紹介しており、また、付録もついていて、そこでもたくさん資料が出ているが、やや多過ぎるという気がする。D者の特徴は、言語力を付ける、あるいは実生活に役立てるという意味で、さまざまな広い意味での作文を書かせようとしている。例えば学校案内のパンフレットを作ったり、推薦文を書いたりたり、1年生に向けた物語を書く、あるいはいろいろな意見文を書かせる、というようにさまざまな内容の文章を書かせようとしているという点の試みが、特に注目できる。また、文字も大きく、紙面もかなりすっきりしている。

E者は、推薦の理由にもあったように、A者と同様に、学習のねらい、あるいはまとめ、ふり

返りというところが非常にしっかりしている。また、教科書をぱっと見た印象としても、非常に明るくて読みやすい。個人的には、A者とC者とE者が、他に比べるといいと思う。

私の意見としてはこれくらいとして、もう少し皆様のご意見を伺いたい。

委員

A者について、1年生は最初に見る教科書ということになるが、佐藤忠良さんのオリジナル原画が出てくる。地元出身の方が出てくるので、親しみやすいと思う。また、最後の付録に平仮名の書き順が書いてあるが、最近誤った書き順で書いている人も多くなっているように思うので、これも気が利いていると感じた。さらに、6年生の教科書には、非常に人気のあるやなせたかしさんや日野原重明さんの文章が載っており、そういう意味では、A者がいいと思う。

E者については、5年生の「百年後のふるさとを守る」ということで、震災関連の文章もあり、内容的にもすばらしいものだと思う。

委員

委員がおっしゃったように、1年生の導入部分に注目してみたが、A者は、いろいろな場面でのいろいろな絵のスタイルはあるが、教室内のイラストが全て統一されていて、自分が学ぶべきことを1つの共通したイラストで表現されているので、子どもにはとてもなじみやすいと思う。一方で、表紙に気球の絵が描いてあってとても斬新だと思うが、1年生に気球のイメージがあるかなと思った。

B者については、言葉、語彙を増やすという工夫がされているが、1年生の教科書のイラストに注目すると、あまりに多くのイラストがその場その場でたくさん出てきて、少し混在しているという感じがする。

D者については、先ほど委員長の意見でもあったが、想像力などがかき立てられる文章があり、特に文のみを表現して絵を全く出していないという中の学習というものが何点かあったので、想像力を豊かにする上でも、とても大切だと思う。また、道徳との関連が一番強いという感じがする。

委員長

本日欠席の委員の意見も含めて、委員の皆様からたくさんの意見をいただいた。それぞれ各教科書会社の教科書について評価すべき点はあるが、皆様の意見をまとめると、5者の中ではA者とE者、これは選定協議会で推薦された2者と合致するが、この2者に関しての評価点が非常に多かった。

他の者について、私もいくつか評価したが、相対的に見ればこの2者が評価されている点が多いので、今後の議論は、5者のうちA者とE者の2者に絞ってもう少し意見をいただいて絞り込んでいくことにしたいが、それでよろしいか。

各委員

異議なし。

委員長

それでは、A者とE者に絞って、再度繰り返しても結構だが、意見をいただきたい。

委員長

いろいろな意見があったが、A者については選定協議会が推薦理由としている単元のねらい、付けたい力に結びつく言語活動が明確に示されているということに加えて、特に1年生での導入部分で選ばれている題材や図、写真など、非常にスムーズに入っていけるような構成になっている点、読書を薦めるという意味で非常に優れているという点が、評価できるという意見であった。また、E者については、選定協議会の推薦理由である学習プロセスが明確に示されていることに加えて、A者への意見としてもあったが、リズム感のある配置内容になっている、きちんとしたまとめがある、また季節感が非常に豊富であるということである。

それぞれに優れた点があるが、何かこれにつけ加えて、あるいは同じような評価があったとして、その優劣についてご意見いただきたい。

委員

全体としてE者の方が、A者に比べて色の使い方が柔らかい印象を受ける。

委員長

私の個人的な印象かもしれないが、ねらいやまとめはどちらもしっかりしているが、E者はねらいの部分あるいはまとめの部分に結構なスペースをとっている。ただ、これが評価という点では少し微妙だと私は思う。その理由としては、最初の学習のねらいを示す部分が2ページにわたっており、やや文字の数が多過ぎて、指導する先生方にはいいかもしれないが、子どもたちがそれを見たときにどうなのかという感じがする。やや焦点がぼけてしまうのではないかと思う。同じことは最後の部分でもあって、既習特記事項をまとめているというところもあるが、ここもや

や詰め込みすぎだと思う。そういう意味では、いろいろな学習事項がある中で、特に重要な部分の焦点が少しぼけてしまう。メリハリという点で、A者に比べると少しぼけている気がする。ただし、これは私の個人的な感覚なのかもしれない。

事務局にお聞きしたいが、先ほどユニバーサルデザインについて説明していただいたが、教科書会社によって紙質が少しずつ違うが、ユニバーサルデザインという意味では、紙質は特に影響ないか。例えば今議論しているA者とE者を比べた場合、A者の方が紙質そのものはやや白っぽい。もちろんE者も白っぽいが、A者に比べると少し黄色がかかっている。A者の方は背景が真っ白な分だけ文字はくっきりと見えるので、非常に見やすい。ユニバーサルデザインという観点で見た時、カラーのページを印刷した場合、どうなるかというところが少し気になる。

教育指導課長

各者によって、紙の質、発色、カラーの部分は異なっている。ただ、それは各者が専門家等に確認し、各者で配慮しているので、それは委員の皆様にご覧いただき、判断していただくのがよいと考える。

委員長

私が見た感覚では、E者だけではなく、B者、C者、D者を含めても、A者だけ紙質が少し違って、教科書を開いた時には、全体がすっきり見え、文字が非常に見やすいという印象がある。

教育指導課長

別紙資料10-1に国語の教科書編集趣意書があり、A者とE者のところに具体的に活字、紙質等々についての詳しい説明が記載されているので、それで比較していただきたい。

委員長

それはどちらかに問題があるということではなく、それぞれの出版社の判断によってということか。

教育指導課長

そのとおりである。

委員長

そういう読みやすさという点も含めて、このA者、E者のどちらがより適しているかについて、もう少し意見をいただきたい。

委員

学年が変わった時に、教科書自体が変わってしまうということについてあまり問題ないという意見もあるが、そうした観点からするとどうなのか。

指導主事

その点については、選定協議会でも議論になったが、基本的に学習指導要領で学ぶ内容について細かく記載されており、それについて全ての教科書で系統立てて配列されており、特に大きな問題はないと考えている。

委員

選定協議会で2者ずつ選んでいるが、2者の優劣はあるのか。

教育指導課長

優劣はなく、2者を推薦しているということでご理解いただきたい。

委員

もし優劣がついているとすれば、教育委員会の結論と一致した場合は議論する余地がないと思う。一方、結論が異なった場合、異なった教科についてのみ議論する方がよりよいものを選べる気がするが、それはできないということか。

教育指導課長

選定協議会の意見をまとめた別紙資料1をご覧いただきたい。これが専門委員会の報告と選定協議会での議論のまとめたものであり、また手元に教科書があるので、それを見ていただいて判断していただくということとなる。

委員長

選定協議会では順位をつけていないので、その点については特に考慮しなくてもよい。

本日欠席の委員の意見は最初に紹介したとおりであり、どちらかと言えば、A者の方が評価すべき点がたくさんあるという意見である。

私も、評価すべき点はどちらにもたくさんあるが、比較という意味では、A者の方が評価すべき点はやや多く、E者の方は少し盛りだくさん過ぎるので、どちらを選ぶかということではA者である。

委員

図書館に関する部分を見ているが、A者の方がすっきりしていて、必要な情報がしっかり子どもたちに伝えられるという印象である。E者は、1ページの情報が多過ぎるという印象である。必要となるのはどこなのか、きちんと目に入ってくるという意味では、やはりA者の方が少し上回っていると思う。

委員

E者の方は、学ぶ楽しさを伝えたいという意識で作っているということが分かるので、そういう意味で1、2年生ではそういう意識でいいと思うが、やはり高学年になるとなかなか楽しいだけの学びではないというところで、分かりやすく、把握しやすいまとめになるのが望ましいと思う。そうすると、1年生の教科書でもそうだが、それが結局全学年の教科書で多くのものを取り上げられ過ぎていて、あまりにも親切に取り上げているため、焦点がどこに定めているのか少し分かりづらいような箇所がある。

委員

全般的にこれだけのものを評価するというのは大変難しいことだが、1年生の時に親しみやすい教科書というのがいいと思う。美術館に行くとき原画があったりするので、佐藤忠良さんの原画があるのはいいと思う。どちらかに決めろと言われれば、私もA者の方がいいと思う。

委員長

さまざまな意見をいただいたが、A者、E者どちらも評価はできるが、いくつかの点例えば導入にあたって1年生が親しみやすいという点、それから読書に関するさまざまな推薦という意味でもA者が優れている。もちろんノートの取り方等も懇切丁寧に示されていて、子どもたちの理解が進みやすいという点を選定協議会の推薦理由に加えて挙げるので、A者を採択の1番目の候補としたいと思うが、それでよろしいか。

各委員

異議なし。

委員長

採択は7月30日の定例教育委員会で行うので、国語に関する本日の議論はこれをもって終了したい。採択に関わるさまざまな議論の内容は事務局で整理をしていただき、7月30日の定例教育委員会で最終的に決定するという事とする。

【書写】

委員長

続いて、書写についての協議を行う。まず、学習指導要領における目標や選定協議会答申等について、ご説明をお願いしたい。

指導主事

小学校「書写」について、ご説明する。

小学校「書写」では、学習指導要領の「各学年の目標及び内容」の書写に関する指導について、第1学年及び第2学年では、「ア姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと イ点画の長短や方向、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと」、第3学年及び第4学年では、「ア文字の組立て方を理解し、形を整えて書くこと イ漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと ウ点画の種類を理解するとともに、毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと」、第5学年及び第6学年では、「ア用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと、イ目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと、ウ毛筆を使用し、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと」と示している。

選定協議会においてとりまとめた小学校「書写」の全発行者の特徴は、別紙資料1答申の「別紙1」の2ページにお示ししている。

選定協議会の答申にある推薦を受けた発行者は、別紙資料1答申の「別紙2」の2ページにある、D者とF者である。選定の主な理由については、まず、D者は「文字について興味・関心を高める資料や、学んだことを生かす例示が豊富であり、国語科と関連付けた内容で学習の広がりを目指し、書写の日常化が図られるよう配慮されている。」ということである。次に、F者は「指導事項に対して、「調べよう」「確かめよう」「広げよう」「振り返ろう」という一連の学習の流れが明示され、主体的な学習が進められるよう工夫されている。」ということである。

委員長

ただいまの説明について、何か質問はないか。

私からの質問になるが、別紙資料6の第2回選定協議会の議事録の5ページ及び6ページを見ると、6者のうち、選定されたD者とF者の2者のみの議論が行われていて、残りの4者についての議論

がないようだが、全く議論されなかったのか。

指導課長

選定協議会では、すべての教科書について意見をいただくこととしていたが、選定協議会ではこの2つの教科書についてのみ、意見をいただいたということである。

委員

別紙資料6の第2回選定協議会の議事録の6ページに、「D者は他者と異なり子どもが集中して学習できるような内容の順番」とあるが、これは具体的にどういうことなのか教えていただきたい。

指導主事

選定協議会においては、子どもが集中して学習できる内容の順番であり、盛り込み方も優れているという意見であった。他者と比べた時、見た目がすっきりしているということ、そして配列がしっかりされているので学習できるような内容の順番であるという意見であった。

委員

F者とD者を比べた場合、例えば1年生の教科書を見ると情報量が大きく違う。どの程度の内容を盛り込むかというのは教科書ごとにある程度決まっていると思うが、ページ数にしても大分違う。1ページあたりの情報量も大分違うが、その辺の決まりはないのか。

教育指導課長

学習指導要領に基づき、それぞれの出版社の編集者が、それぞれの考えに基づいて、1ページにどれだけの情報を入れるか、またページ数をどの程度にするかということを決めている。それを踏まえて文部科学省では検定を行い、その検定を通った教科書の中から選定するというので、ご理解いただきたい。

委員長

その他に質問がないようであれば、議論に入りたいと思う。

最初に本日欠席の委員から書面で意見をいただいているので、その委員の意見を紹介する。委員はD者とF者について推薦されている。

D者について、かな、漢字の基本形が明確に示され、分かりやすい。部首や文字の配列などから関連の漢字の応用力が身につく。学習の応用として手紙、はがきによる礼状やエアメールの書き方、ノートの工夫、新聞の作成など具体的に例示されていて、文字の力を感じ取れる構成になっているという点を評価している。

F者について、特段の特徴はないが、硬筆、毛筆に関わる基礎基本を漏れなく取り上げている。シンプルな構成になっているが、それだけ分かりやすいという評価である。

私の意見を申し上げますと、A者は、学年ごとに学習の進め方が提示されていて、例えば毛筆の入門では、道具の準備や後始末等が丁寧に示されている。ただ、調査委員会や選定協議会の意見にもあるが、手書き文字のため、文字の形や結びの部分にやや統一感を欠いていて、それは子どもたちにとって分かりにくいのではないかという気がする。ただ、それについては、それほど大きな問題ではないと思う。

B者は、書写の1つの目的として学んだことを実生活あるいは国語に生かすというところがあり、封筒の書き方、手紙の書き方というような実生活に関わる場所での指導が繰り返し出てきていて、非常に丁寧であるという点は評価できる。

C者は、「トライ・アンド・チャレンジ」というコーナーで、学んだことを書くことに結びつけるという点など、いろいろ工夫していると思う。

D者も学んだことを生かす例示がたくさんある。先ほどの実生活とか国語で学んだ成果を生かしていくという点では選定協議会でも評価されているが、非常によく配慮されており、教科書全体としては、色も落ち着いていて見やすいという感じがする。

E者も、国語と関連付けた内容がたくさん示されており、日常生活に関わることも同じようにたくさん例示がある。目的にかなった内容であるという感じがする。

F者も、学習したことを、国語などその他の部分に生かす例示がたくさんある。それから、付録として豊富な学習材が示されていたり、教科書の中に書き込む欄もたくさん設定されていて、子どもたちが書くということに習熟するという点では非常にいいと思う。色も全体として落ち着いていて、読みやすいという感じがする。なお、F者だけが教科書のサイズが少し違う。ワイド判になっていて、3センチか4センチくらい横幅が広がっていて、これは後で伺いたい、これはランドセルに入るのかという心配がある。ただ、ワイド判であるという点で開いたときに紙面に非常に余裕が感じられる、ゆったりとした紙面構成になっていて、ランドセルの問題は別として、子どもたちが使用するという意味では非常に見やすい、使いやすいものになっている。ただ、ワイド判であれば、もっと別のことに活かせるのかなという気もするが、とにかく見やすいという点では評価できると思う。この教科書はランドセルに入るか。

教育指導課長

確認していないが、最近のランドセルは大きくなっているの、問題ないと思う。

委員長

確かに最近のランドセルはA4判対応にはなっているが、これはワイド判なので、少し心配である。

教育指導課長

A4のフラットサイズなどは入るが、確認していないので、何とも言えない。

委員

A者については、1年生から6年生まで、書写の学習の仕方や毛筆学習の進め方、何を学ぶのかが分かりやすく、めあてを持ちやすいという印象を受けた。

B者については、1年生の教科書で基礎・基本がしっかり身につけられるように説明が丁寧であり、「広げよう」はやはり実生活や学校生活に活かしやすいと思う。

C者の「トライ・アンド・チャレンジ」は、日常生活や他の教科の学習に活かせると思うし、1年生で使った字の書き始めを意識させるための4つの部屋は、仙台市でもたしか国語の漢字で、どの部屋から始まって何の部屋を通過するという学習の仕方をしているので、この部分はすごく子どもたちにとって親しみのある教え方であり、字の組み立ても色分けされていて、分かりやすいと思う。

D者については、1年生の教科書の文字が特に大きく、1ページの情報量が多過ぎないため、学習する字に集中でき、何を書くのか子どもたちがしっかり自覚できると思う。この傾向は全学年共通しており、メリハリがあるという印象である。また、めあてが明確であり、目標を持って学習しやすく、資料は関心が深まって日常生活に役立つと思う。何よりも毛筆のところでは、筆の力の入れ方であったり、筆の運び方であったり、字形を整えて書くためにどこを意識するのがすごく分かりやすく、子どもたちが見て分かりやすい方法で教えられると思う。

E者は、左手で筆を持つ児童に配慮した毛筆用具の置き方と準備の説明がされており、「もっと書こう」や「広がる学び」で考えたことを言葉で表す、それから伝える学習に広がっていくように感じられ、百人一首や古典に親しむことができると思う。

F者は、教科書の横幅が広いため、硬筆は書きやすいと思うし、古典をなぞって学べると思う。ただ1つ気になるのが、1年生の裏表紙に書写体操というものがあり、その6番に「左手置いて、さあ、書こう」というものがあった。そうした場合、左利きの児童もいる中で「左手置いて」と記載されているので、少し気になるところである。

委員

C者について、ふり返り学習というものを重点にしている、各国の片仮名の挨拶なども載っており、これは面白いと思う。

D者について、私は導入部分の1年生の最初の部分を丁寧に見ているが、とてもシンプルな図解だが、丁寧に伝えており、特に鉛筆の持ち方についてきちんと図解を示している部分が分かりやすいと思う。D者は、別紙資料10-2の教科書編集趣意書の21ページに、編集の基本方針として、書くことが好きになる教科書というものを前面に打ち出している。やはりそのとおり、子どもがとにかく書くことが非常に楽しめる工夫を随所でしている教科書だという印象を受けた。

F者も、やはり同じように丁寧に作っているという印象を受けた。ただ、D者と比較すると、鉛筆の持ち方の点で「箸と同じような持ち方をしましょう」という表現があり、正しい箸の持ち方ができない子どもたくさんいるという話があるので、その表現が気になった。それともう一つ、最初の姿勢を表すときにリズム感のある言葉で伝えているが、そのリズムの意味が少し分かりづらかった。「足べたとん」というようなリズムだが、その「とん」という意味がよく分からない。手を添えるのを「とん」と表現していると思うが、他の教科書では「押さえる」という表現をしていて、リズム感あふれていていいが、私にはその部分が少し分かりづらかった。

委員

2者挙げるとすれば、F者とD者だと思う。ただし、最近の小学校1年生はレベルが上がっているかもしれないが、F者は情報量が多過ぎる気がする。また、文字の大きさがバラバラであり、少し見にくい気がする。

D者は、1年生にちょうどいいくらいの情報量である。文字の大きさなども工夫されており、非常に見やすくすっきりしているので、紙面づくりとしてもまとまっている。私には子どもが3人いるが、一度も教えたことがなく、子どもの教科書を見たこともなかったが、どの教科も非常にすばらしい。私が小学生だった50年前とは雲泥の差があって、うらやましい。そういう中で比較してみると、意外に各社で違うところがあると感じた。

委員長

皆様からいろいろな意見をいただいた。それぞれの教科書についてそれぞれ評価できる点があり、

C者、B者もいくつか評価する意見はあったが、皆様の意見を伺っていると、全体を通しては、D者とF者を評価する意見が多い。

その中で、1人の委員からD者、F者について優劣をつけた意見をいただいた。これからは、D者、F者に絞って、そのいずれを候補とするかという議論に移りたい。

先ほどの意見でもそれぞれ少しずつ優劣がつけられていたと思う。委員はどちらかと言えばD者、また本日欠席の委員も評価すべき点という意味ではF者よりはD者の方がより評価すべき点が多いという意見である。他の2人の委員の意見も、選定協議会の推薦の内容、特にその中で発達段階を考慮した学習内容や、導入の部分でどちらの教科書がいいかということでは、D者の方が文字情報量も適当であって、説明も適切で非常に分かりやすいという点でかなり大きな評価をされている。

他に意見があれば伺いたいですが、ただいまの議論をまとめてみると方向としては同じ方向になると思う。もし異議がなければD者、F者、2者に絞っての議論になるが、すでにその内容に踏み込んだ議論があった。選定協議会の推薦理由として挙げられている他の教科と関連づけた、あるいは実生活と関連づけた学習の広がりを目指すという点、それから発達段階を考慮した学習内容が段階的、系統的に配列されている、特に導入部分で非常に分かりやすく適切な内容になっているという点で、D者を選定するという方向でまとめたいと思うが、それでよろしいか。

委員

異議なし。

委員長

特に反対の意見はないようなので、書写についてはただいまの議論を踏まえて、D者を7月30日に最終的に決定する方向でいきたいので、事務局で本日の議論の内容を分かりやすくまとめていただきたい。

【社会】

委員長

続いて、社会についての協議を行う。まず、学習指導要領における目標や選定協議会答申等について、ご説明をお願いしたい。

指導主事

小学校「社会」について、説明する。

小学校「社会」では、「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」ことを目標としている。選定協議会においてとりまとめた小学校「社会」の全発行者の特徴は、別紙資料1の「別紙1」の3ページにお示ししている。

選定協議会の答申にある推薦を受けた発行者は、別紙資料1答申の「別紙2」の3ページにある、A者とD者である。

選定の主な理由については、まず、D者は「問題解決的な学習の流れを段階的に示し、問題意識を持って学習が進められるよう単元構成に工夫がされている。特に、すべての小単元にふり返る場面が設定され、思考力・判断力・表現力等の能力の向上が期待できる。」ということである。

次に、A者は「伝統や文化、それらの継承に努める人々をいろいろな事例で紹介し、日本の伝統や文化に対する理解を深める学習が展開できるように配慮されている。」ということである。

委員長

ただいまの説明に関して何か質問等はないか。

委員

別紙資料6の第2回選定協議会の議事録の6ページを見ると、問題解決学習が重視されているとあるが、これは教科書の中で具体的にどういったことを指しているのか。

指導主事

学習指導要領の中に問題解決的な学習の一層の充実ということが明記されている。社会科の目標を達成するために単に知識の習得だけではなく、児童が疑問を持ち学習問題をつくり、調べ、まとめるという学習過程が大切であり、この流れが問題解決的な学習である。教科書の中には今話した問題解決的な学習ということは知識を習得するというのではなく、一連の学習の流れということである。

委員長

本日、宮城県教育委員会作成の「平成27年度使用教科用図書小学校選定資料社会科（別冊）」の改訂版が配付された。別紙資料6の選定協議会の議事録を見ると、この社会科（別冊）についての議論があり、この別冊に記載がある、ないということが記載されているが、この改訂版が出され

た経緯とその内容について簡単に説明いただきたい。

教育指導課長

まず、6月5日付で宮城県教育委員会から、別紙資料8として配付している「平成27年度使用教科用図書小学校選定資料社会科(別冊)」が送付されてきた。この別冊が作成された経緯としては、平成25年度の宮城県議会において請願書が提出され、県の教育長が作成を指示したものである。この別冊は各教科書の特徴を一層明確にするため記載内容、記載分量を比較するために作成されたものである。調査研究委員会においても、この別冊を参考資料として調査と研究を行うとともに、選定協議会でもこの別冊をもとに議論を行った。

その後、7月10日付で、6月5日付で送付されたものの差し替えということで、本日配付した改訂版が送付されてきたが、内容に一部誤りがあったものである。委員長ご指摘のとおり、別紙資料6の第2回選定協議会の7ページに、選定協議会の委員長から「ある図書の記述について空欄になっているが、これは震災や防災についての記載がないということか。」という質問があった。それについては、別紙資料8の改訂前の別冊の12ページが該当部分になるが、「該当記述なし」と記載されていたことから、事務局として「そのとおり、記載がないということである。」とお答えしたが、7月10日付で送付されてきた改訂版を見ると、その内容について記述があったということで、具体内容が記載されている。そういうことで、改訂版が作成されたということをご理解いただきたい。

委員長

B者について、宮城県教育委員会が行った調査では当初は該当記述なしとされていたため、第2回選定協議会での「震災や防災についての記載がないということではよろしいか。」という質問に対して、「ない」と答えているが、実際には該当する記述はあったということである。その点を踏まえて議論していただきたい。

他に質問がなければ社会についての議論に入りたいがよろしいか。

各委員

異議なし。

委員長

最初に本日欠席の委員から書面で意見をいただいているので、最初にその紹介から始めたい。

委員はD者とA者を推薦している。D者については、国際紛争、国際協力、環境問題、国際機関、途上国支援、情報化など今日的課題を具体的かつ分かりやすく記載されている。この世代が直面する重要課題に言及しており、共同で討論する教材として適している。さらに、国の政治体制や生活との関わりなどが分かりやすく記述されている。また3年生から6年生に至る内容の配列も適切であると、3点について評価している。

A者については、自然災害、環境問題、個人情報管理、農水産業、資源とごみ問題、東北地方の復興支援、平和主義、多文化共同など、これからの世代に必要な基礎知識が十分に学べる。近隣諸国とのつながり、日本国憲法の三原則を重視されており優れているという点で評価しているが、できればEUなど欧州についても取り上げてほしかったという希望があった。

続いて、私の意見を述べていきたい。別紙資料6の第2回選定協議会の議事録6ページ及び7ページを見ると、4者のうち、推薦されたA者、D者についての議論しかない。先ほどの宮城県の調査で該当記述なしの部分で、もう1者が取り上げられているが、それを除くと議論はA者、D者についてのみ行われている。それ以外のB者、C者についても、それぞれ評価できる点はあると考えている。

4者の教科書いずれも身近な地域を教材とし、その観察や見学に始まって、そういう体験的な活動を基礎にしながら学習を進めているという点で評価できる。形は違うが、いずれも問題解決型の手法を取っている。きちんとしたまとめがあり、適宜コラムを含む資料を提示して、学習効果を高めるよう努めている。自然災害や環境問題についてもいずれの教科書もページを割いていて、そういう意味では、どの教科書も小学校教科書としては優れている。

その上でさらに感想を述べると、A者については、調べ方、まとめ方を「誰々さんのノート」という形で具体的な子どもたちの目を通してあげているという点で、子どもたちには理解しやすいと思う。

B者は、どんな問題がそのテーマにあるのだろう、どうしてだろうという、まず子どもたちに問題意識を持たせるところから取り組みを始め、問題解決型のテキストとして成り立っている、そういう構成になっているのがいいと思う。

C者は、キーワードや学び方、調べ方コーナーというものをたくさん挙げて、知識を習得するための具体的な工夫がある。問題解決型の学習という点では対象についてどんな問題意識、疑問を持ったのか、どういう資料を見て何が分かったのかということ子どもたちに考えさせた上で、順序

を踏んでその問題の解決に当たらせるという手法をとっていて、きちんとした内容になっている。全体的に、C者の教科書は昔風の正面から取り組んだ教科書であり、正統派と言ってもいいと思う。

D者は、非常に資料がたくさん挙げられていて、学んだ知識をその次に広げるというところで非常に考えられている教科書である。全体に図表を含めてバランスがよく、他の三者に比べて文字や図が非常に見やすくなっている。もしかするとこれはユニバーサルデザインの問題かもしれないが、残りのA者、B者、C者は少し色がきついというか、図の線が太いという気がする。それらに比べ、D者は非常に見やすいという点で子どもたちにとっては扱いやすいと思う。また、いずれの教科書も自然災害等を取り上げているが、D者は東日本大震災の事例もかなり取り上げていて、そういう意味でも子どもたちにとっては親しみやすい教科書だと思う。

委員

A者については、「わくわく社会ガイド」が学習の仕方を分かりやすく説明していると思う。昔の暮らし方の絵が各者の教科書に載っているが、ちょっと陰に隠れて見えない教科書もあるが、A者は昔使っていた道具類が一番見やすいと思う。また、方位を見つける方法だが、見つける方法がとてもしっかりと丁寧で書かれていて、これは月の観察などに役に立つなど、理科の学習とも関連してくると思いつつ見ていた。また、グラフや表が教科書の端のほうに統一して配置されていて見やすいという印象を受ける。「深める」では学習活動を促しており、「まとめる」では子どもたちがふり返りしやすいと思う。環境の視点や、個人情報、日本国憲法、多文化共生社会など、これから今後の社会を生きる子どもたちに向き合う課題がたくさん掲載されていると感じた。

B者について、「ようこそ社会科へ」は社会の学習の仕方を説明しており、地図記号が一番分かりやすい。また、自然であったり環境であったり、公害、災害の視点で取り上げており、「まとめる」とか「広げる」は言語活動に結びついていると思った。6年生だったと思うが、「これから学習する時代」で歴史上のどこを今自分たちが学習しているのか意識しやすいような工夫がある。

C者については、47都道府県の塗り絵マップで自分が学んだところを自分で塗っていくというやり方で、学習意欲がわくと思った。また、3年生から6年生まで共通して、東日本大震災、自然災害、福島原発事故、釜石市の率先避難について取り上げており、6年生の日本の領土や国境をめぐる問題なども取り上げられていて、丁寧に説明している。単元の終わりには「ふりかえってみよう」があり、知識を確かなものにできると思う。

D者については、3年生になって初めての社会、生活科から社会に変わるということで、仙台市のまちや仕事載っているのが、社会を身近に感じながら学習できると思う。仙台市の子どもたちにとっては、すごく興味を引くと思う一方で、副教材として「わたしたちのまち仙台」があり、その内容とほぼダブっている。岩切の曲がりネギにしても蒲鉾工場にしても、ほとんど同じである。否定ではないが、少し疑問がある。「学び方・調べ方コーナー」は学習の目標を持ちやすいと思うし、歴史ではその時代の絵が描かれており、その時代の人々の暮らしや、生活の様子をその絵から想像しながら学習に入っていける、そういう工夫がある。各学年で自然災害を取り上げていて、特に自助の大切さというものについて言及している。また情報や福祉の面では、子どもたちが今後将来向き合う課題を取り上げている。

委員

A者は、5年生で情報ネットワークということで、メディアリテラシーを取り上げていて、今の時代に即している面があると思う。この中にも宮城県を題材にした教材もあるので、子どもにとっては親しみやすいのではないかなという印象を受けた。

B者については、5、6年生ということでどうしても分量は多くなるが、やはり教科書自体が少し分厚いという印象を受けた。内容としては、1つの単元に絞って4者それぞれの教科書を見比べてみたが、丁寧に分かりやすく表などにまとめていると思う。

D者とC者は、とても分かりやすく、特にD者は委員がおっしゃった仙台市を取り上げているということで、子どもたちもとても身近に感じて楽しみながら学習できるというイメージを持った。身近なキャラクターなども使っており、親しみやすい印象である。ただ、1つ気になったのは、学習していく上で学校名が分かっちゃう箇所があり、仙台市内の子どもたちにとって、そこまで分かっちゃうので、それが果たしていい効果なのか、そうでないのか、私には分からないので、その辺について伺いたい。

委員長

今の委員のご意見だが、教材としてあまりにも身近なものを取り扱うというのは、何か問題があるか。

指導主事

選定協議会の中でも事例地が仙台市であるということで、仙台の伝統や文化、地域資源を学習するにあたっては子どもたちがなじみやすいということがあり、弊害よりもなじみやすいという点で、

プラスの面が多いのではないかという意見が多かった。

委員長

副教材との関わりについて、意見は出なかったか。

指導主事

副教材については、選定協議会でも、調査研究委員会でも、特に意見はなかった。

委員

教科によってそれぞれの出版社で全国共通のものと地域ごとに違うものというのはたくさんあるか。例えば仙台市の地理を勉強するために、地域限定の教科書を作っているのか。おそらく歴史は全国共通の内容だと思うが、地理の場合には地域色が豊かになるので、そういう意味では全国の出版社でも地域ごとに違う教科書になっているのではないかと思うが、いかがか。

委員長

それはそうではなく、全国一律だと思う。D者の3年生の上巻では、仙台市を取り上げているが、3年生の下巻や4年生の上下巻では、それぞれ別の地域を取り上げている。例えば中国地方のある地域を重点的に取り上げて、その地域についていろいろな側面から学ぶというような構成になっていて、3年生から6年生まで全体を通して、日本全国の主要な地域を取り上げて、満遍なく教材にしている。

教育指導課長

補足させていただくが、学習指導要領では地域のことを学習する段階があり、それは副教材で仙台市を取り上げて、学習する。そこから、それがだんだん広がって全国的なことを学習していくということで、教材はそのように配列されている。その考え方はそれぞれの教科書会社の編集の考え方によって構成されている。学習指導要領に基づいた検定は通っている教科書ということで、最低限の内容については担保していると考えていただければありがたい。

委員

歴史について、いろいろ考えながら拝見した。東日本大震災の時の日本人の行動が世界から賞賛された。これはずっと昔から、そういう行動をするのが日本人だったと思っている。D者の6年生の上巻に、「エルトゥール号遭難事件」というものがあるが、これは「ノルマントン号事件」と隣り合わせで記載されている。「エルトゥール号遭難事件」については、非常に感動的な話がある。日本人が遭難したトルコ人を助けてあげたものだが、その100年後にトルコはその恩返しをしてくれた。それはイラン・イラク戦争の時になるが、イランから日本人を出国させるため、トルコが飛行機を用意して、日本人を優先して出国してくれたというものである。本来であれば、まず自国民を守らなければならないが、トルコとイランは近隣であるため、自国民に対しては自動車で出国しろということで、日本人を優先してくれた。それは、100年前に助けてもらったお返しをただけだという、本当に感動的な話である。

そういうことを小学生に教えることによって、東日本大震災の時の行動と同じようなイメージが描けるものであり、郷土愛あるいは自国を愛するというような、そういうものにつながるようなものが実は歴史上たくさんある。

D者には、「エルトゥール号遭難事件」は記載されているが、100年後の一番感動的な内容が記載されていない。それについては、先生方が説明すればいいと思うが、日本人がすばらしい行動をしたケースはたくさんあるので、そろそろ歴史の教科書には、そういうことを記載してもらいたい。

C者については、日露戦争の部分に「アジア諸国の人々に独立への自覚と希望を与えた。」と記載されている。C者以外の教科書にはそういうことは記載されていない。日露戦争で日本が勝ったことによって何が起きたかという点、東南アジアで独立運動がどんどん高まったことにつながっている。よって、日本の東南アジアへの影響は非常に大きかった。

社会科の歴史の果たす役割というのは非常に重要になっていると思う。そういう意味からすると、自分の国の歴史に対して誇りが持てるような教科書であって欲しいと思う。少しずつそういうものが出てきているので、これからもどんどん変わっていけば、面白いと思う。その中でもD者が感動的な「エルトゥール号遭難事件」や、「ノルマントン号事件」が隣り合わせで記載されており、少し希望が持てる時代になってきたと感じた。

内容的にはD者が一番いいと感じたが、C者だけがアジア諸国の人々に独立への自覚と希望を与えたということをはっきり書いているが、どの教科書にも記載していただければ、小学生が自国の歴史に対して誇りが持てるようになるという気がする。

委員長

皆様から意見を伺ったが、4者の教科書について、それぞれ評価できる点があるが、4者のうちA者とD者の2者が評価すべき点が多く、評価がより高い。

よって、このA者とD者について、もう少し時間をかけてさらに比較をしていきたい。

先ほど私の意見を申し上げたが、4者の教科書ともきちんと押さえるべきところは押さえて優れた内容である。それは変わらないので、そういう点で優劣をつけるというのはなかなか大変だと思う。いずれの教科書も現場に行った時、例えば市場で働いている人、工場で働いている人の言葉、そういう働いている人から見た職場の紹介というものも、すべての教科書に載っている。子どもたちが社会についての目を広げるという意味で、どの教科書も非常によくできていると思う。

そうした中で、選定協議会がA者とD者を推薦しているのは、教材がより分かりやすい、あるいは配列が優れている、資料が豊富であるということだと思う。

先ほど地元を取り上げることについていろいろな意見があった。副教材とのダブリということもあって、その点はどうかという意見もあったが、私の感じ方としては例えばD者については、先ほど申したように各学年、各時期にそれぞれ日本の違った地域を取り上げて地域をいろいろな側面から見えていくという見方をしている、仙台市が3年生の教科書で取り上げられたのはある意味では偶然ということになるわけで、他の学年では他の地域についての学習をする。ただ、3年生というのは社会科の最初の学年で導入の時期に当たる。そういう導入の時期に身近な地元が教材として挙げられているというのは非常に入りやすいと思う。

D者は、それ以外にも、震災関連、自然災害、自然環境問題の関連など、いくつか東北地方の教材が取り上げられていて、そういう意味でも非常に分かりやすい。

それから、先ほど申し上げたことの繰り返しになるが、全体に紙面がすっきりしていて読みやすく、分かりやすい教科書になっている。A者、D者のうち、どちらを選ぶかという話になると、D者の方がやや優れていると思う。

さきほど委員の意見の中で、A者は昔の暮らし方を示した絵が非常に分かりやすいという話があったが、D者についてもそういう絵から昔の暮らしに入り込めるという話があった。

委員

D者は、6年生で歴史に入っていく時の絵が、全体的にその時代背景を移しているの、歴史を学んでいく時に時代背景がつかみやすいのではないかと印象である。A者の際に申し上げたのは、歴史民俗資料館などに行った時に、学習に役立つのはA者の方の絵であり、より分かりやすいということでそのような話をした。

D者に関しては、文字と文字の間隔が広くて見やすいという印象がある。

委員長

A者とD者では、文字のフォントが少し違うかもしれない。

A者もちろん地元のことは取り上げられていて、気仙沼市の「森は海の恋人」という形で自然環境問題の題材として取り上げている。

委員はいかがか。先ほどの意見では、どちらかというとならA者の方をより推薦しているようにも感じられたが。

委員

A者、C者、D者の3者を比べて、同じ項目を見た時にA者とD者がとても分かりやすいという意味である。やはりD者は、仙台市という身近なところの学習ができるというのは、滅多にないチャンスである。教科書に自分の地域が載るということは、子どもたちにとって、もしかしたら非常にうれしい出来事ではないかと思う。自分のことを振り返ってみても、そういった身近な話題が教科書に載ったという記憶がないので、そうなのであれば、そういったものを取り上げているD者の教科書を使って、子どもたちに楽しく学んでもらいたいという思いはある。

委員

D者は、私が知っている人がたくさん載っており、またうちの商店街も載っているので、仙台市のために作った教科書だと錯覚をしたくらいである。そういう意味でも、2人の委員がおっしゃるように滅多にないチャンスである。どこか知らない地域の勉強をするよりは、仙台市の勉強をした方がいいと思うので、どちらかというとならD者の方がいいと思う。

委員長

最初に紹介した本日欠席の委員もD者、A者の2者を挙げているが、その中ではよりD者の方が優れているという意見である。議論の内容としてはA者、D者のうちどちらかを選ぶということになると、D者を推す意見が多い。

特に注目されるのは、仙台市が事例地として取り上げられていて親しみやすいということだが、もちろんそれだけではなくて、D者の教科書は基本的なところはもちろん優れていて、問題解決的な学習の流れという意味でもきちんとしている。そういう前提に立った上で、仙台市が事例として取り上げられていて、子どもたちが社会の学習に入っていく上で非常にスムーズであろうと想像できる。そういう意味では、A者よりD者の方が、仙台市の子どもたちにとって優れているのではな

いかという判断のもとに、社会科の教科書としてはD者を候補として挙げたいと思うが、それよろしいか。

各委員

異議なし。

委員長

それでは、事務局で今の議論の内容をまとめていただき、整理して7月30日に提示していただきたい。

【地図】

委員長

続いて、地図についての協議を行う。まず、学習指導要領における目標や選定協議会答申等について、ご説明をお願いしたい。

指導主事

小学校「地図」について、説明する。

小学校「地図」では、学習指導要領の「各学年の目標」の中に、第3学年及び第4学年においては、「地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにすること」、第5学年においては、「社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の意味について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにすること」、第6学年においては「社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の意味をより広い視野から考える力、調べたいことや考えたことを表現する力を育てるようにする」ことが示されている。

選定協議会においてとりまとめた小学校「地図」の全発行者の特徴は、別紙資料1の「別紙1」の4ページにお示ししている。

選定協議会の答申にある推薦を受けた発行者は、別紙資料1答申の「別紙2」の4ページにある、A者とB者である。

選定の主な理由については、まず、A者は「東北地方が折り込みで一望でき、中心地の仙台市について詳しく掲載されており、東北地方の指導がしやすい。」ということである。

次に、B者は「A4版の大きさになっているため、地図全体が大きく見やすくなっている。活字の大きさも適切である。」ということである。

委員長

ただいまの説明について、何か質問はあるか。

委員

推薦理由だが、今読み上げていただいた他に、別紙資料1の別紙2の選定協議会の答申の推薦理由として、A者は、2冊の地図同士を組み合わせると日本全国を概観できる構成にしたり、あとは見開きの地図をつなげることで球体であることを捉えたりすることができる工夫がある、とあるが、これについての説明は別紙資料10-4の教科書編集趣意書には、載っていない気がするが、これはこういった形で分かったことか。

教育指導課長

それについては、実際にちょっとやって見せたいと思う。

指導主事

A者の日本地図の13ページと14ページを、このようにつなげると日本全体が見渡せる。

委員

実際に、授業でこういうやり方するのか。

指導主事

平面ではなくて立体的だなということを試しにやってみたりする。

教育指導課長

今の内容について、再度ご質問をしていただいて、今の確認の作業についてご発言いただければありがたい。

委員

もう一度質問を申し上げると、選定協議会の推薦理由の中にA者の方に、2冊の地図帳を組み合わせると日本全体を見せるようにしたり、あるいは筒状につなげたりして、そういう視覚効果があって関心を高めることに適しているということだが、これについてイメージが湧かないので教えてくださいということだったので質問をした。それについては、地図帳13ページと14ページをお友

達同士で重ねることによって、日本地図が大きくイメージできるということで理解した。

委員長

他にご質問がないようであれば、また本日欠席の委員から意見をいただいているので、まず委員の意見を紹介する。

A者については、地形が立体的に表現されており、例えば災害地図、理解しやすい、また写真が豊富に使用されており発色もよい、という2点を評価点として挙げている。

B者については、A4判サイズで見やすく、情報量も豊富であるという点で評価できるが、4年生には大き過ぎて使いにくいかという疑問を呈している。

続いて、皆様からご意見いただきたいが、まず私から意見を述べさせていただきます。A者は、別紙資料1の選定協議会の答申「別紙2」の4ページに推薦理由として、東北地方が折り込みで一望できるとの意見があるが、東北地方は折り込みで入っているのは、実はB者も同じであり、この点については特に大きな違いはない。ただ、その後の仙台市について詳しく掲載されているというのは、それは確かにそのとおりである。ページの隅の方に、宮城県の一部の拡大図があり、その拡大図をもって仙台市が詳しく掲載されていると言っているが、仙台市について詳しくというほどの内容ではないと思う。

B者については、東北地方の折り込みの図はあるが、確かに宮城県の一部なり仙台市を拡大したものはない。その意味ではA者とB者の違いはある。逆に、首都圏や京都府、奈良県を見た場合には、A者の首都圏に比べると、はるかにB者の方が詳しい。これはA4判ということも活かされていて、はるかに詳しく、見やすい図になっていて、京都府、奈良県も同じである。この点では、B者の方が優れており、どの地域が詳しいかという点については、それぞれいい点、悪い点がある。

最も異なる点は、やはり大判かそうでないかというところである。先ほど委員からは、A4判は大き過ぎるのではないかという意見もあるが、最近の教科書はA4判が増えているので、A4判であるということはそれほどマイナス要因にはならないと思う。逆にA4判であるだけに、全ての図や文字が大きく、A者とB者の文字を比べた場合に、これは決定的に違うと思う。少しの違いではあるが、B者の文字の方が大きく、地図の一番の使命はやはりその地点の情報を得ることだと思うので、そういう意味ではこれは間違いなくB者の方が優れている。

それから、委員の最初の意見に地形が立体的に表現されているとある別紙資料6の選定協議会の議事録の7ページに、「A者の地図は高低差であり、大陸棚の表し方など立体的に表現している」というように、立体的だという意見がある。委員がおっしゃっているのは、この図だが、自然災害を扱うところでやや立体的な図が載っている。ただ、普通の日本全国、例えばこういう大きな図面では濃淡で海底の地形は表現されているが、見やすい、また立体的であるというほどではないと思う。

B者の方は、最初に日本全体の余計な説明のない、文字があまり入っていない、まさに日本の地形と日本周辺の海底の様子を見てくださというだけの図がある。これは濃淡がはっきりしており、3D仕様というか、立体感がよく分かる。日本海溝がどんな形をしているか、あるいは日本海が非常に深い海であるという日本列島の形そのものを視覚的に捉える意味では、この図が非常に優れていて、分かりやすい。

その他では、防災の関係は両方に取り上げられているし、それほど大きな違いはない。

ただ1つ違いを挙げるとすると、東北地方だけになるが、A者は岩手県や宮城県の合併前の市町村名が比較的たくさん載っている。B者は、合併後の市町村の名前と、それから有名な地域の名前はあるが、各地域の名前が載っているわけではない。ただ、宮城県や岩手県以外では必ずしもそうではないが、東北地方という点に限って言えば、A者の方が細かい地名や旧市町村の行政区を示す固有名詞が載っていて、親切という気がする。

ただ、それはあまり大きな違いではなく、まとめて言うと私の意見としてはやはり大きい方がいい。地図はやはり分かりやすさが第一というのが、私の意見である。

委員

A者に関しては、災害を防ぐというところで、自分の命を守るために何をするのか考えさせるような工夫があると思った。それから、仙台市とその周辺が拡大して取り上げられており、位置関係が分かる。世界地図のページには、国旗も掲載されていて、その国の位置を見ながら国旗も覚えるという楽しさもあると思った。

ただ、紙の質が反射するというか、光があるときに見にくいという印象を受ける。それに比べると、B者の方は、あまり光の影響を受けない紙質だと思った。

B者は、貿易に関しての輸出入の比較が同じ図の中で示されているので、その量がどの程度の規模で行われているのか、一目で分かる。また、アジアの中での日本の位置がどこに位置してい

るのかも分かりやすく、写真も豊富である。それから、日本の自然災害が、どの地域でいつ起こったのか、写真も織り交ぜながら分かりやすく、プレートや南海トラフの位置が載っており、分かりやすいと思う。日本の都道府県の統計の部分では、A者に比べて文字が大きいので、その分見やすいなという印象を受けたし、やはり一番はこの紙質の差が大きいと思う。

委員長

結局、地図をどのように使うかというのが問題になってくる。つまり他の教科との関連でどう使うのか。統計資料については、社会科で使う時には、おそらく社会科の教科書に載っているし、自然災害については、社会科や理科の教科書にそれぞれ載っていると思う。特に自然災害の場合は、仙台市では副読本を作っている。むしろ、その副読本をどう活用するかということを考えての方がよく、そういう意味では地図になくてもいいとは言わないが、その辺の違いはむしろ副読本の活用を考えて、地図は地図本来の役割で見た方がいいという気がする。

いろいろな資料を同時に活用することになると、先生方は結構大変だと思うが、災害に関してはせっきくの副読本があるので、やはりそれはきちんと活用すべきである。確かにB者の方は見やすく、評価できると思うが、地図として仙台市の子供もたちが使う地図帳としてはそれほど多くを望まなくてもいいと思う。

委員

A者の方は、やはりなじみ深い。委員がおっしゃったように少し光沢があるので、ちょっとした加減で見にくいという感じはするが、見慣れているという点では全く問題はないと思う。防災に関しても防災マップで触れており、震災関係にも触れているので、やはり東北地方の指導などもしやすく、地図に対する関心を深めてくれると思う。

B者の方は、やはり大きくて大変見やすいという印象がある。ただ、少し気になるのは、イラストなどいろいろなものを盛り込みすぎていて、本来の地図を読み込むという作業には、かえって邪魔になってしまうのではないかと思う。子どものイラストも使っても分かりやすくしているが、海の中に行ってみたりして、そのイラストがあまりにも象徴的なので、それがかえってその場所のイメージをすり込ませてしまうのではないかと、少し心配である。

委員

もらえるとしたら大きい方がよく、B者の方がいい。

それから、これだけの自然災害の情報があるが、実は東日本大震災の前から分かっていたことであり、それが非常に残念である。これは2011年3月以降調べて分かったことではなく、元々分かっていたことである。そういう本を探すと、過去にもいろいろあるようだが、それが世の中にほとんど出ていなかった。そういう意味で、この図書が大震災の前からあったら、非常に良かったのという思いで読んでいた。最近調べて、これだけの地震が起きていたと分かったわけではなく、過去から分かっていたものである。

B者の方は、非常に分かりやすく、大きいので、非常に参考になると思う。もちろんA者にも同じようがあるが、少し小さいので、自然災害についてこれだけ分かりやすく出ているB者の方がいいと思った。

ただし、実際に授業で使いやすいのがどちらかは分からない。その辺は判断できないので、先生方はA者の方を使いやすいと考えている可能性はある。

委員長

いろいろな意見をいただき、この地図に関しては意見が結構分かれていて、それぞれいいところ、悪いところ両方あってなかなか大変だが、もう少しだけ意見をいただきたい。

先ほど私は防災副読本のことでも申ししたが、それは脇に置いておいて、地図だけで見た場合でいうと、例えば防災という自然災害について見ると、2者ともに取り扱っていて、今ご意見にあったようにB者の方は非常に大きく、分かりやすい図になっている。A者は、それに比べると少し図は小さいが、A者がB者と少し違うのは、そこに防災マップづくりというものを挙げているという点である。大きさ見やすさではB者だが、そういう防災マップづくりというようなことを意識させているという意味ではA者がいい。この辺はなかなか迷うところである。

その他では、紙質の問題があり、私はあまり紙質のことは気にしていなかったが、確かにA者の方は光る。これもどういうふうにして見るのかということによるが、光るという点と文字が相対的に小さいという意味では、確かにA者の方がやや見にくく、B者の方が見やすい。

ただ、先ほど委員からの意見もあったように、もしかするとA者の方がコンパクトで扱いやすい、副教材みたいな形で使う時には、あまり大きくない方がいいと考えている先生方もいるかもしれない。

それぞれ一長一短があって、なかなか難しいが、もう一步踏み込んだ意見をいただきたい。

委員

先ほどキャラクターについて少しお話しましたが、委員がおっしゃったように使う先生方がそれをどう捉えているかというところで、そういう話は別紙資料6の第2回選定協議会の議事録には載っていないが、選定協議会の前の段階とかで何か意見等がないかどうか、お聞きしたい。

委員長

先ほど説明があった閲覧資料として、各学校の先生方が自分であればどれを使いたいという意見をまとめたものがあり、これを見ると一目で分かるが、どうするか。紹介するか。

教育指導課長

別紙資料1の選定協議会の答申に基づいて、いろいろなご意見をいただいているが、別紙資料2の調査研究委員会の報告書や、別紙資料3の調査研究委員会専門委員の報告書をご覧いただければと考えている。

委員長

それらの報告書の内容は、先ほどからの議論でほとんど出てきた内容である。少なくとも調査研究委員会の報告書で取り上げられている内容は、先ほどからの議論にも出てきたことであり、特に目新しい意見が載っているわけではない。これまでの議論で出てこなかったのは、例えばB者では定規のイラストが使われていて地図上の距離感が分かりやすいというものがある程度であり、あとはA4サイズで全体に明るい、すっきりして読み取りやすいということである。A者の方は、東北地方の市町村名が記載されているとか、2冊の地図帳を組み合わせて使えるということが中心で、国旗の件も出てくるが、先ほどから議論されてきた内容である。

教育指導課長

別紙資料3の10ページと11ページに専門委員の報告が記載されている。

委員

A者の方がいいという数は多い。

委員長

数は多い。例えば別紙資料3の11ページの比較表を見ると、挙げられている項目数はA者の方が多。例えば「社会的な思考判断力を育むために適しているか」という観点の部分では、A者については3点挙げられていて、B者については、全く挙げられていないが、B者でこの観点の記載がないのかというと、きちんとB者にもこのA者の方が大きな紙面を使っていてB者よりも分かりやすいが、吹き出しとかがあるとかということ、むしろキャラクターを使っているのはB者の方であり、防災に関してはどちらも先ほど言ったように充実していて、こんなに違う評価になるのかというのが私の個人的な意見である。それから、いろいろな図やグラフについても2者ともたくさんの図表を示しており、そんなに差があるとは思えない。確かに別紙資料2や別紙資料3を見ると、専門委員の方々はおそらくA者の方がより使いやすいと感じているのだろうという気がする。そういうようなことも考慮に入れた上で最終判断をしていただければと思う。

7月30日まで延ばしてもあまり意味はないと思うので、できれば今日この場で一定の結論を出したいと思う。先ほどから何度も申し上げているように特に大きな優劣がAとBであるわけではなく、どちらの地図帳が選ばれようとそれを先生方がきちんと使っていただければ、子どもたちにとってはいい教材だと思う。

委員

東京都とその周りの関東地方と見比べてみたが、A者は少し黄色が強い気がする。A者とB者を比べた時に、B者は文字が大きいことは大きいですが、栃木県や埼玉県あたりは色の中に混じってしまっていて文字が見にくいという印象を受ける。ここで差をつけるとすれば、A者は東京湾の埋め立てや残された自然が載せているなど、その違いくらいだと思う。

委員長

個別の各地方、今の埋め立ての例や、近畿地方や中部地方の図で見れば、A者の方はプラスのイラストやデータがいくつか載っている。近畿地方で言えば、神戸市付近の様子なども分かるなど、データが少しではあるが、載っているという点は確かに違うかもしれない。

委員

そういった情報の違いがあると同時に、高低差が分かる。

委員長

先ほどの仙台平野の図というのは、そういった付加された情報の1つとして東北地方の図の中に入っている。北海道の図の中には、畑作の様子や釧路湿原、網走付近の様子というものが付け加わっており、その分の情報量の違いはある。

委員

東京都とその周りを見比べた場合、A者の方が文字が小さい割に見やすい。A者は少し黄色が強いが、その黄色の周辺を見ると見やすいと思う。

委員長

あと、B者の方は、丘陵、山岳地帯になるとややトーンの違いが小さく、A者の方が、よりトーンの違いがはっきりしている気がする。全体的に見ると、B者の方は茶色が強くて、その分少し黒色の活字とのコントラストが少ないかもしれない。

委員

文字と地図がかぶっている。何か引きずり込まれてしまっているような印象を受ける。

委員

判断しろと言われても、実際の教育現場でどのように使われるかということが分からないので、少し難しいが、例えばB者は日本の姿、都道府県の統計についても文字の大きさが随分違うので見やすい。私ではこういう小さな文字では厳しいが、小学生は目がいいので、あまり関係ないと思う。これだけ専門の先生方が評価する点の数が違うというのは、我々が見ているよりもたくさん違っているのだから、そこが気になる。

委員長

別紙資料6の第2回選定協議会の議事録の7ページに、A者は地図の老舗でそれなりに手慣れているという意見が出ているが、そういう作りになっていると思う。確かに今まで多くのところで使ってきたものなので、先生方にはA者の方がなじみやすいと思う。議論の中でそういう意見が出てくる。もちろん活字の大きさも決定的に違う。見やすいかどうかと言えば、特に表などになると見やすいのはB者というのは間違いないが、その辺を差し引いても、先生方の中では使いやすいというふうにお考えになっている人が多いかもしれない。

委員

2冊の地図帳を組み合わせて見ようみたいな、これはほとんど意味がないと思う。

委員長

そのとおり、あまり意味はない。

委員

1冊しかもらえないわけである。

委員長

日本全国を見るならまた別の図もあるので、そちらを使えばいいので、これあまり意味はない。

委員

仙台市について詳しいというものも、この程度の大きさでは何の意味もないと思う。

教育長

意見が分かれており、この後算数もある。意見集約できない状況なので、7月22日に本日欠席の委員も含めて、全員揃ったところでもう一度話し合うということにはいかがか。その間また委員の皆様もいろいろ考えていただいて、再度議論することとしてはいかがか。

委員長

本日欠席の委員の判断はだいたい分かるが、みんながいるところで顔を合わせて議論するとでは違って来るかもしれない。意見が少し分かれているので、無理に今ここで決めることはしない方がよいのかもしれない。7月22日の冒頭、まずこの地図から始めるということで、結論は先送りという提案があったが、皆様、それでよろしいか。

各委員

異議なし。

委員長

それでは、再度検討していただいて、本日欠席の委員を含めて、7月22日はこの地図についてあらためて議論することとしたい。

【算数】

委員長

続いて、算数についての協議を行う。まず、学習指導要領における目標や選定協議会答申等について、ご説明をお願いしたい。

指導主事

小学校「算数」について、説明する。

小学校「算数」では、「算数的活動を通して、数量や図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てる

とともに、算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気付き、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる。」ことを目標としている。

選定協議会においてとりまとめた小学校「算数」の全発行者の特徴は、別紙資料1の「別紙1」の5、6ページにお示ししている。

選定協議会の答申にある推薦を受けた発行者は、別紙資料1答申の「別紙2」の5ページにあります、C者とF者である。

選定の主な理由については、まず、C者は、「言語活動の場面や身に付けさせたい言葉などが巻頭や巻末に配置されており、学習のねらいに迫る言語活動を促す工夫がなされている。」ということである。

次に、F者は、「前後の学習の系統性が目次に示され、学習のつながりを意識し、学ぶ意欲を高めるように工夫されている。」ということである。

委員長

ただいまの報告に関する質問等あれば、いただきたい。

私から1点。今の説明でも言語活動という言葉が出てきて、選定協議会でも算数での言語活動というのは何か、という質問があった。その質問に対して指導主事等が答えているが、少し分かりにくい点もあるので、ここであらためて言語活動というのは、どういうことを指しているのか説明いただきたい。

指導主事

算数における言語活動とは、まず言語、算数においては言葉だけではなく数や式、図、表、グラフなども言語と捉えている。子どもたちは言葉や数、式、表、グラフなどを用いて自分の考えを表し、伝え合い、学び合うことを通してよりよい考え方などを導き出し、問題を解決していく、このような活動を言語活動と捉えている。

委員

別紙資料6の第2回選定協議会の議事録の8ページに、学習意欲や家庭学習との関連においての工夫が見られるとある。この工夫というのは具体的にどういったことを指しているのか教えていただきたい。

指導主事

調査研究委員会の時に、C者、F者の2者は自主的に学習を促すような補充問題が巻末に設けられている、また、答えも自分で答え合わせをしたり、保護者の方にも答え合わせをしていただけるように分かりやすく明示されているという意見があった。

委員

B者は、ユニバーサルデザインの観点から色遣いや写真などの内容に配慮があるとよいということは、少し問題があったというふうに思うが、どういう点か。

指導主事

こちら調査研究委員会の時に、写真などが多用されているが、その写真を見ると、情報量が多過ぎて子どもによっては写真の周りのものに気が散ってしまって、集中して学習に取り組めないという意見があった。色遣いの方では、色がきつくて目に刺激を与えるように思われ、気になるという意見があった。

委員

その時には、この図など、具体的な話は出ていないのか。

指導主事

具体的な話は出た。例えば、色の方について言えば、B者の2年生の上巻の38ページに、赤い四角4番の本がたくさん並んでいる図がある。調査研究委員会では、こちらの図のような場合、本が並んでいるところの右側、赤い背表紙のところがとても気になってしまったり、こちら側だけを数えてしまう子がいるのではないかという意見が出された。

また、写真については、B者の2年生の下巻の14ページに緑の四角9番に写真がたくさん載っているページがある。この14ページにある写真のうち右の一番上の運動会の様子の写真、前

の方で演技している子どもたちは5人一組で分かりやすいが、後ろの応援席まで写っていることで「ああ、ここに誰々がいる」とか「俺はここだ」というようなことで、話や気持ちがそちらの方向に向いてしまう子がいるのではないかという意見が出された。

委員長

他に質問がなければ議論に入っていきたい。

最初に、本日欠席の委員から書面で意見をいただいているので紹介する。

委員は算数に関しては、選定協議会と同様C者とF者を推薦されている。C者については、算数の基礎と実生活における適用を適宜結び合わせた内容となっており、日常生活において算数の知識が必要とされること、また、役立っていることが認識されるように工夫されている。6年生の学びの手引きは日常生活にも応用でき、効果的である。単元の系統性が整理をされており、自主学習ができるし、つまずきなどがあつたときはどこでつまずいたか点検がしやすい構成になっているという2点を評価している。

F者については、算数の目で震災の被害を調査したり、新幹線の持つ力を考えたり、題材に工夫がなされている。算数から中学校の数学への橋渡しも、国語科、社会科の地理、歴史的知識なども活用した学際性が興味関心を高め、学習意欲につながるよう工夫されているという2点を評価している。

続いて、私からの意見を申し上げる。

A者は、巻末に補充問題とその答えが示されていて、自主的な学習が期待できるという点が評価の意見として挙げられているが、同時にこの問題は少し多いのではないかという意見もある。確かに、少し多過ぎて、子どもたちにとっては少し荷が重いのではないかという気がする。6年生の教科書には6年間のまとめがあつて、これは比較的コンパクトによくまとめられている。

B者は、先ほど情報量や写真が多過ぎるのではないかという意見があるが、私はその点よりは、文字が小さいという気がして、少し読みにくいように感じる。それから、中学校への橋渡しについては、B者は別冊になっているので、その分、分量が多くなつていて、中学校への移行というものをかなり重視しているのが読み取れる。

C者は、これは選定協議会も評価をしているが、目次や索引がきちんとしていて、学習のねらいが分かるようになっていて、あるいはまとめもきちんとしていてということがあつるが、中学への橋渡しについてはあまり力点を置かれていないように思う。言語活動の問題は、比較的よくできていると思う。「2人の」というのがたくさん出てきて、「2人の考え方を説明しましょう」ということで具体的に違う例を挙げて、子どもたちがどう問題を理解して、どう解いていくのかということが分かりやすくなつていて。

D者は、同じように言語活動はあるが、他の者に比べるとやや少ない気がする。また、別紙資料6の第2回選定協議会の議事録の8ページに、各学年のまとめの部分があつて少し足りないという意見があり、確かに5年生までは少しあつさりしている気がする。6年間のまとめそのものはある程度充実したものになっているが、各学年になると少し物足りない。

E者は、ノートづくりが非常に分かりやすい構成になつていて、子どもたちにとっては、後で述べるF者とともに、このE者のノートづくりのページというのは役に立つと思う。このE者だけが少し変形版になつていて、ワイド仕様になつていて。見やすいという評価があり、確かにそのとおりだと思う。余裕のある構成になつていて、余白を既習部分との関係を示したり、あるいはいろいろなコメントをつけるということに使つていて、有効に活用されている。そういう点では評価できるが、もっと使い方があるという気がする。ただ、非常に見やすい教科書になつていて。

F者は、先ほどご説明いただいた選定協議会の推薦理由にあつており、前後の学習の系統性が目次に示され、まとめの部分でもきちんとしたまとめがあつて分かりやすく、言語活動の面でも自分の考えを書く、伝える、あるいは友達の考えを今度は自分がその立場に立つて説明するという方法で、図表、式を使って数学的な思考というものをきちんと、それに習熟するような内容になつていて。先ほども申し上げたように、F者はノートづくりの例が丁寧である。他の教科書に

も全てノートづくりの項目はあるが、非常に分かりやすい示し方、提示になっているのはF者である。さらに、中学校への橋渡しの部分もかなり充実している。

以上、それぞれ評価できる点があって、6者の中で今の時点で少し抜きんでたものを挙げるとすれば、C者、E者、F者の3者というのが私の意見である。

それでは皆様から、意見をいただきたい。

委員

A者は、1年生でスムーズな学習の流れがあって、図を書き込むスペースがあるので、1年生の子どもには取り組みやすいのではないかと思う。2年生では、計算の仕方を書くスペースが確保されているので、どこに書いていいのかがすごく分かりやすい。6年生の「わくわく算数ミュージアム」は、楽しみながら身近なところから歴史など新たな視点で算数を捉えることができると思う。6年生は中学校の数学にもつながっていくことになるが、1ページの文字数が多いように感じる。

B者は、力をつける問題は自分のレベルに合わせて選べるようになっている。「算数探検隊」は、日本の文化・生活面から算数を意識させており、中学校の数学につなげられるよう、別冊にして意識づけを強くしている。ただ、やはりB者は文字が小さいという印象を受ける。

C者は、ノートの書き方が具体的で考え方が児童に分かりやすいように説明されており、ノートに残すことを意識させている。キャラクターのアドバイスであったり、「友達のノートを見てみよう」という吹き出しでノートを残すということを意識させている。算数で使いたい考え方については、前の学年をふり返りながら考え方を示して、復習しながら次に進むという形になっている。図形は色分けがされているので、子どもたちにとっては考えやすく、「ステップアップ算数」は自分の学習の進み具合によって選べるし、どんぐりのようなキャラクターがあり、それが子どもたちの学習を助けるという方向に働くと思う。

D者は、よいノートにするためのポイントが分かりやすく、具体例も見やすいと思う。低学年で10のまとまりを作っているが、その星があまりにもカラフルなので、子どもたちはそちらの方に気持ちが向いてしまうのではないかと感じる。学年のまとまりの分量が少ないと思うが、その前に「発見！算数島」で自分の興味に応じて学習できるような工夫がされている。それから、2年生以上の下巻と5年生、6年生の読み取る算数で読解力が養われるように配慮されている。6年生の算数、卒業研究、これが活用の問題を取り上げつつ、中学校の数学につながっていると思った。

E者の「算数マイトライ」は、基礎を固めながらステップアップできるように工夫されていると。「次の学習のために」では、前の学年で学習したことを再確認して、それにさらに基礎固めをしやすいとしている。それから、2年生以上の「学び方ガイド」では言葉での表し方、伝えることを意識させる工夫がされていると感じた。

F者は、1年生で仲間づくりから始まって、10のまとまりに進んでいくなどの流れがスムーズである。鉛筆や消しゴムを使って学習する場合に、使いやすい紙質、丈夫で使いやすい紙質になっている。「ばしよをあらわそう」では、言葉で伝える学習ができると思う。2年生から6年生では、「算数マイノートをつくろう」や「どんな計算になるのかな」といったことで、学習したことの確認と基本を身につけさせる工夫がある。各学年の復習から算数自習コーナーにかけての中で、学習の定着が図られると思われ、6年生の「数学ヘジャンプ」という教科書名や、「算数卒業旅行」というコーナーは、中学校の数学を意識させていると思う。それから、1ページに書かれている情報量やバランスがいいように感じる。

委員

私は、どの教科書にしても、やはり單元ごとに学習を定着させようという、そういう工夫が見受けられると思う。よって、その中で一番着目したのは、やはり導入部分である。最初に算数に出会う子どもたちが、足し算というものに入っていく上で、どのように教科書で取り扱っているかということで注目してみたが、「足し算」という定義をしっかりと言葉で表して、式でどういうものかということを表しているところと、そうでないところがある。そこが少し気になってい

て、その点で申し上げると、全てにおいて定義がなかったのは、B者とC者で、この2者は定義がなく、そのまま足し算の式から始まっている。

あと、ノートのとり方について着目して見た場合に、各委員の意見にもあったように、やはりC者とF者の2者のものが、とても取り組みやすく、親しみやすくなっており、またレイアウト的にもとても見やすい配置をしていて、分かりやすいと思った。

委員長

足し算に関しての定義があまりはっきりしないのはB者とC者の2者でよいか。

委員

はい、B者とC者の2者は足し算の定義を表していない。

委員

F者は、何となく算数嫌いにならないような配慮をしているように感じた。よいのか、悪いのかは難しいが、1年生の目次がいかにも目次だという雰囲気ではない。これが目次の機能として、どうなのか分からないが、それも1つの配慮だと思う。非常に紙面が見やすい感じがする。それから、単なる算数ではなく、現実世界の中で算数を使うということで、高学年になるにしたがって、興味を持ってもらえるような配慮をしているという感じがする。そういう意味では、F者が比較的に見やすい。

委員長

6者のそれぞれについて意見をいただいた。これも他の教科書と同様それぞれ評価できる点、そうでない点、たくさんあるが、これまでの皆様の意見で相対的な観点から見ると、選定協議会で推薦しているC者とF者の2者を評価する点がたくさんあったように思えるが、それでよろしいか。そういう捉え方でよろしければ、C者とF者に絞って、さらにどちらがいいかという議論をしていきたいと思うが、それでよろしいか。

各委員

異議なし。

委員長

本日欠席の委員の意見はどちらもかなり評価していて、無理やり順位をつけるとすれば、F者に比べるとC者の方が評価する点が多いように思われる。

私の意見は先ほど申し上げたが、もう一度繰り返すと、いろいろ前後の学習の系統性を示しているという意味では、C者、F者ともに優れていて、目次での取り上げ方あるいはまとめでの分かりやすさという点では、C者もF者も似たような取り扱いをしている。どちらか選べと言われれば、F者の方が子どもたちにとっては分かりやすいと思うが、どちらもその点について不足しているということはない。

それから、先ほどの言語活動の点についても、どちらも工夫していて、少し差をつけるとすればノートのつくり方の具体性がC者に比べるとF者の方がより具体的だと思う。子どもたちがノートづくりというものを、特に低学年で最初に始める際には、F者の方が分かりやすい気がする。

別紙資料1の選定協議会の答申別紙1の5ページに、C者は2年生、3年生、4年生が上下巻の分冊になっているので、下巻にふり返りの工夫があればよいというコメントがある。それに対して、F者は上下巻に分かれているが、下巻の教科書にふり返りをまとめてあるので、その点は問題ない。巻末にまとめてあり、これはむしろ巻末でない方が分かりやすいと思うが、少なくともまとめはあるので、いちいち上巻を持ってこなくてもいいという配慮されているという点で評価できる。

中学校へのつなぎという点では、どちらもかなり意識をしている気がするので、その点については、それほどの違いはない。

委員からは、先ほどどちらかと言えば、F者の方がいいという意見があった。

委員

一般的に算数あるいは数学は社会に出るとあまり使わない。理系は分からないが、文系はあまり使わないところがある。やはり生きた数字として勉強できるということは非常に面白い

が、そうでなければ、社会に出ると電卓叩いて終わりになってしまう。そういう意味で、F者の考え方が算数や数学に興味を持って、社会に出ても使えるというところにつながりそうな気がしたので、F者の方がいいと思う。

委員長

実生活での活用ということを考えた時には、F者の方が子どもたちはそういう意識を持ちやすいという点がある。

委員

私は先ほども申し上げたように、導入部分はやはりC者の方に納得できない部分があったので、やはりF者の方がいいと考えている。導入部分もそうだが、先ほど委員長もおっしゃったように、中学校への橋渡しとしては、6学年の最後に数学という言葉をきちんと用いており、中学校への意識づけをしているという点では、とても親切だと思う。

委員

F者の6年生の「算数の目で見てみよう」のところだが、震災の経験を生かそうということで、仙台市民のアンケート調査結果がグラフとして一部載せられている。そういう意味では、仙台市に住む子どもたちにとっては身近なことであり、自助や共助を考える上でも、これは算数だから関係ないと言えば関係ないのかもしれないが、そういった視点もあるので、身近に学習できるのではないかと思う。

委員長

先ほど紹介したように本日欠席の委員はC者、F者の2者を評価しているが、どちらかと言えばC者という意見である。これまで伺った意見では、ここにいる4人の意見はC者、F者を比べた場合には、どちらかと言えばF者である。別紙資料1の選定協議会の答申別紙2の5ページの推薦理由として挙げられている学習の系統性に加え、ノートづくりや中学校へのつながり、あるいは実生活への算数の応用、実生活の中での算数を意識させるという意味で、よりF者の方が優れているというのが、大方の意見である。

4 付 議 事 項

第12号議案 職員の人事に関する事項について

(職員の人事異動について)

(秘密会)

(総務課長 説明)

原案のとおり決定

5 閉 会 午後6時55分